

琉球大学学術リポジトリ

いい授業・いい教師：
マンネリズムを打破するために

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉本, 靖, Yoshimoto, Yasushi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41507

いい授業・いい教師：マンネリズムを打破するために

「ことばの構造と意味」担当 吉本 靖（法文学部）

1. 旬の授業

2009年の夏休み、思いがけずもプロフェッサー・オブ・ザ・イヤーの受賞を知らせる電話をいただいた。その前年に担当した人文系科目「ことばの構造と意味」での受賞だという。全く予期していなかったので本当に驚いたが、やはり嬉しかった。

実はその知らせを受けた年は、同科目の授業がマンネリになって来たなと感じていた。教育委員の仕事をしていて超多忙であったこともあって、授業内容は前年のものほとんど変化なし。これではいけないと思っていた頃受賞の知らせで、本当に意外であった。でもよく考えてみると受賞はその前の年、2008年の授業に対してである。それで合点した。その年の授業は私の中ではそれまでで一番いい出来だったからだ。とはいえ、私の授業は特に変わったこともない普通の授業である。テキストを使用せず自家製のハンドアウトを毎回使用しているのが特徴といえば特徴かもしれないが、それはこれまでいいテキストが見つからなかったため、特にそのことにこだわっているわけではない。今回、そのような普通の授業でもこの賞をもらえるのだということ、図らずも証明することになった。

さて、なぜ2008年の授業はそれまでで一番良かったのか？自分なりに分析すると次のようになる。この科目は2005年から担当させてもらっている。最初の年はいつものように試行錯誤の連続なのだが、次の年からは前年の経験を生かせるので、教え方や授業内容が少しずつ充実してくる。そしてひとつのピークに達したのが2008年だったのではないだろうか。いってみれば「旬」の授業だったといえるかもしれない。もちろん、いい学生たちが集まってくれていたという側面もあることは間違いないけれども。

しかし、「旬の授業」であったのなら、その後は下るばかりという危険性がある。のほほんとしてはいられない。実際、既に

述べたように2009年にはマンネリズムの到来を感じ始めていたではないか。そこで、この機会に授業のマンネリズム打破の方法について私なりに考えてみたい。その方法として、まずは、いい授業とはどんな授業なのか、いい大学教師とはどんな教師なのかについて考え、そこから解決の糸口を探ることにする。

2. いい授業とは？

「いい授業とは何か」ということについて考える時、いつも私の頭に浮かんでくるのは、留学したアメリカでの授業である。それも大学院生として学び、同時に教壇にも立たせてもらったノースキャロライナ大学チャペルヒル校での経験だ。琉大での学部時代にミシガン州立大学でも学ぶ機会をいただいたが、その時は自分は学生として学ぶだけだったということもあり、授業のノウハウについてあれこれ考えたりはしなかった。一方のノースキャロライナ大学チャペルヒル校（以下、UNC-CH）では、入学して3年目からティーチングアシスタントとして働かせてもらったこともあり、どうすればいい授業ができるのかという問題意識が、学期中の私の頭の中に常にあった。

UNC-CH で担当した授業は、日本語と、Introduction to Language という、日本でいえば言語学概論に相当する科目である。どちらも学部生向けの科目で、授業の具体的な企画から講義、評価にいたるまですべてをまかされた。両者はそれぞれ、実用性を目的とする外国語教育と、学問の基礎を習得させることが目的の専門教育という位置づけであるから、授業形態はかなり異なる。しかし、「いい授業」という観点からは、共通する部分も当然ある。「いい授業」とは何かということに対して、系統だった教育を UNC-CH で受けたわけではないが、モデルとなるような授業をしてくださる先生は身近に何名か存在した。私のイメージする「いい授業」は、その先生たちから得たものである。

では、どういう授業を「いい授業」と感じたのか。それは教師と学生のインターアクションがうまくとれている授業だ。月並みな答えだが、やはりこれを挙げないわけにはいかない。この点、アメリカの教師は日本の教師に比べて非常に恵まれている。なぜなら、教師が学生に発言させようと努力せずとも、自主的にどんどん発言してくる学生が大勢いるからだ。(全ての学生がそうだということではない。日本のシャイな学生よりもずっとシャイだと思うような学生も少数ではあるが、いる。) **Introduction to Language** を教えた2年間は、授業中の質問攻めに正直言って大変苦労した。大学院生とはいえ、まだ専門的な知識は浅いし、おまけに外国語の英語でやりとりをしないとイケないのである。最初の頃は教壇に立つと身震いがするほど緊張した。しかしそのお陰で言語学の様々な分野について、自分なりに必死に勉強するという貴重な経験を得た。ほとんど徹夜で講義準備をすると、翌日午前の授業は睡眠不足のため結局うまくいかなくなるという教訓を得たのもその頃である。

アメリカの大学のように多くの学生が自主的にどんどん発言するような環境では、教師は様々な質問を予期しつつ授業準備をすることによって自然といい授業ができるようになる。学生の質問に対して的を射た答えを与えられるように、そして教える題材を理路整然と説明できるように事前に十分準備をすれば自ずといいインターアクションのとれた授業になってくる。

ひるがえって、日本の大学、とりわけ琉球大学の状況はどうか。残念ながら、学生からの自主的な発言はほとんど期待できない。共通教育の受講者数の多い科目では特にそうである。そのため、私は帰国してから強い逆カルチャーショックを受けた。自分も琉大出身であるから、琉大での授業の様子はもちろん予想できた。それでも **UNC-CH** での授業に慣れてしまった身には、琉大の授業での学生の反応のなさに、当初は相当戸惑った。自分も学生時代には彼らと同じような受講態度だったにもかかわらず、である。

そこで私はどうしたかということ、学生の立場になって考えてみた。少人数のゼミの

ような授業ならいざ知らず、受講生が大勢いる教室で教員の質問に気軽に応えるというのは、沖縄を含めて日本の伝統的な文化の中では非常に難しい。自分なりの答えが思いつく場合でもそうだ。そういう時には、教師が指名して聞いてくると、答えやすいし、答えざるをえない。ということで、結局私は指名して学生の反応や理解を確認するというスタイルに落ち着いてきた。時々、アメリカ的な雰囲気を出して、質問を受講者全員に投げかけ、答えてくれる学生がいるか見ることはある。運がよければ誰かが発言してくれて、めでたしとなるのだが、成功する確率は5割といったところだろうか。もちろん、指名をしても常に答えてくれるとは限らない。中には指名されることに恐怖感を感じる学生もいるようだから、無理強いはいないようにしている。答えられなければそれでもいいというメッセージを送り、とにかく学生を授業に関与させることに主眼をおく。そうすることによって、教師が話すだけの一方通行の授業ではない、双方向の授業の形が一応は作られる。とはいえ、授業内容によっては、つつい一方通行の講義になってしまうことも多々あるので、双方向授業のための工夫を今後も続ける必要があると強く思っている。

ここで冒頭の問いに戻ると、今述べたような工夫の中に、教師のマンネリズムを打破するひとつの鍵が存在するように思う。教える内容は同じでも、受講生が違えば捉え方が異なるのは当然だ。学生たちが自由に自分の考えを述べられるような雰囲気があれば、教師も新鮮な反応に接する機会が増えるであろう。うまくいけば、私が **UNC-CH** で経験したように学生からの質問攻めに会うということも起こりうる。そうすれば、しめたものだ。マンネリズムを感じるなんて悠長なことをいつている暇はなくなるだろう。

3. 大学教師として大切なこと

教師と学生のインターアクションのある授業は、私にとって確かに理想とする授業形態ではある。しかし、それだけでは片手落ちだ。大学教師として最も重要なことは教える内容の充実であろう。そして、その中にマンネリズム打破のもう一つの重要な

鍵があると思われる。言語学、とりわけ理論言語学の世界は、他の多くの学問がそうであるように日進月歩の世界だ。よく知られている現象については新しい分析がどんどん提案されてくるし、これまで誰も気づかなかった現象が発見されたり、理論的枠組みが大転換したりして、研究の最前線は常にエキサイティングである。そのような研究の動向を講義に反映させ、現在進行形の知の営みを語ることを私は忘れていたのではないか。教える内容のアップデートを適宜行うことが、マンネリズムを回避するもう一つの有効な方法だろう。かなり考えが整理されてきたので、次回の「ことばの構造と意味」は大幅な授業内容の変更を行おうかという気になってきた。実は、いいテキストが出たので、それを使ってみようかという気持ちが少し前からあったのだ。そのことをそろそろ実行に移す時期だろう。これを書きつつ、久しぶりにこの講義に対するワクワク感を感じ始めている。

教える内容の充実ということを考える時、私の脳裏にいつも浮かんでくるのは、著名な言語学者であり、教師としても名高い Howard Lasnik の言葉である。あるインタビューで “So what makes one a good teacher, what are the ingredients of good teachership?” と聞かれ、Lasnik はこう答えている：“You have to know your material; that’s numbers one, two, and three: you have to know your material, there’s no substitute for that.” つまり、いい教師の要素とは「1 番目も 2 番目も 3 番目もみんな同じで、それは教える題材についてよく知っていること」というのだ。いい大学教師の条件として、これほど当たり前でありながら、心に強く響いた言葉は、後にも先にも他にない。

そして、いい授業の条件としてあげたインターアクションのある授業の前提になっているのは、教師が教えている題材について十分な知識を持っていることである。学生からの質問に「それはわからない」を繰り返しては、どんなに学生たちが自発的に発言しても、決していい授業にはならない。この点、私はまだまだ修行が全然足りない。専門分野の研究を充実させて、英語力も更に高めていかねばならないという

ことは百も承知だが、毎日雑務に追われてしまっている。「英語力」を含めたのは、英語も教えているからである。）どうやって研究の時間を確保するのか、これについては私には語る資格が全くない。しかし、あきらめることだけはせずに限られた時間を有効に使っていきたいと思う。

4. いい教師とは？

最後に、最近目にした印象深い言葉に言及して、この短いエッセイを閉じることにしたい。イギリスの教育学者、ウィリアム・アーサー・ワードはこう述べている。「凡庸な教師はただしゃべる。良い教師は説明する。すぐれた教師は自らやってみる。偉大な教師は心に火をつける。」この言葉が印象深かったのは、UNC-CH 時代の恩師 Alec Marantz の言葉に、似たようなものがあったからだ。彼は、著書のはしがきで自身の博士論文の指導教員であった Noam Chomsky に対する謝辞を次のように述べている。“More by example than instruction, Noam showed me how to do linguistics.” これはまさに「すぐれた教師は自らやってみる」の実例といえるだろう。Chomsky のような天才的な学者は、自らやったことを例示するだけでも弟子の教育ができるようだ。そしてカリスマ性を持つ Chomsky は、もちろん弟子たちの心に火もつけている。

「説明する」のにさえ四苦八苦している私にとっては、Chomsky のような学者・教育者は雲の上の存在のような気がするのだが、彼のような人が実存していることは大きな励みになる。とりあえず、これまで述べてきたようなマンネリズム回避の方策をいろいろ試してみても、少しずつ前進していきたいと思う。